（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	田中　孝平
論文題目	高校の探究学習を通じた高大接続に関する研究 ―移行についての学生の語りの分析にもとづいて―		

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、「高校の探究学習を通じた高大接続」における学生の移行の様相を学生の語りにもとづいて描き出すことで、高大接続に新たな見方を提起することにある。わが国では、1990 年代以降、高大接続が、「エリート型接続」（受験に向けた教科学習に取り組み、学力試験を経て大学へ入学）と「マス型接続」（高校で受験に向けた教科学習に注力せず、AO 入試や推薦入試を利用して大学へ入学）に分化した。2000 年代以降になると、エリート型接続では、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）等において「高度化された探究学習」が導入された。さらに、2010 年代後半以降、エリート型・マス型の両方において「探究型大学入試」が実施されるとともに、2018 年高等学校学習指導要領改訂で探究が教育課程に組み込まれることによって、「高校の探究学習を通じた高大接続」が生み出されることとなった。では、このような高大接続の展開にしたがって、学習者は高校から大学へと「円滑な移行」を経験しているのか。高大接続の先行研究では、教育する側の視点からの議論が中心を占めていたのに対し、本論文では、学習者が「高校から大学への移行」をどのように経験するのかに光をあてることによって、高大接続の現状と課題を明らかにしようとしている。

本論文は序章・終章を含め、8 章からなる。第 1 章では、高大間の教育接続を、「大学が提供する、移行期に焦点化した教育接続」と、「主に高校が提供する、大学の学びを先取りする教育接続」に分け、前者は移行期に集中的に「補完する」、後者は大学教育の一部を「先取りする」という性格をもつことを示した。とりわけ、高度化された探究学習は、高校教育と大学教育との間の連続的な接続を可能にする一方で、「高校の大学化」をもたらすという二面性を有していることが明らかになった。

第 2 章では、学習者の「高校から大学への移行」の様相を捉えるための理論的枠組みを構築した。まず、「高等教育への移行」を「導入としての移行」「発達としての移行」「生成としての移行」に概念化したゲイル（T. Gale）とパーカー（S. Parker）による整理を紹介した上で、そこでは制度などの社会文化的文脈の考慮が不十分であることを指摘し、それを補うために社会文化的アプローチに立つビーチ（K. Beach）の「共変的移行」の概念、特に「単方向移行」「双方向移行」「媒介的移行」の概念を援用することにした。その結果、本論文の検討課題が、①高校から大学への「単方向移行」、②高校における教科学習と探究学習の間での「双方向移行」、③高校の探究学習における大学の学習の「媒介的移行」に整理された。

第 3 章～第 6 章では主に、「再帰的テーマティック分析」による学生の語りの分析を通じて、これらの課題に答えることをめざした。第 3 章では、高校で高度化された探究学習に取り組み、総合型研究大学 V 大学に進学した大学生 6 名の語りの分析の結果、アカデミックスキルにおいて高大の連続性を経験している一方で、理工系の低年次科目では「高次の統合的能力」の発揮を求められる学習機会が不足していることから、非連続性も経験していることが明らかになった。とはいえ、学生は、それらの科目の学習内容を研究プロセスの要素として意味づけながら学習しており、高校の探究学習が大学の卒業研究の「媒介的移行」として経験されている可能性が示唆された。

続いて第 4 章では、V 大学の学生 4 名に対する語りの分析から、エリート型接続において教科学習と探究学習の「双方向移行」が高校から大学への「単方向移行」に及ぼす影響が検討された。その結果、多くの学習者が、高校時代、教科学習と探究学習

を異なる系統の学習として位置づけ、両者の間の双方向移行に困難を抱えていたこと、高校から大学への単方向移行において興味・関心の拡張・変化・消失が生じていることを明らかにした。

第 5 章では、著者が TA として関与してきた W 高校において、「教科学習における主体的な学習態度」「探究学習の取組への積極性」「学習への深いアプローチ」という 3 つの変数をもとに学習者タイプのクラスター分析を行い、さらに、そのうち計 15 名の学習者を対象として大学初年次まで追跡的な半構造化インタビュー調査を実施した。その結果、教科学習と探究学習の双方に積極的に取り組む生徒は両者の間に有機的な関連づけを見出し、大学の学習にも連続性を感じていることが明らかになった。

第 6 章では、マス型接続の事例として、中国地方の Y 大学の学生 4 名と Z 大学の学生 2 名の計 6 名を対象に、高度化されたものではない通常の探究学習を経験した学生が、大学への単方向移行をどのように経験したのかを検討した。エリート型接続の場合と同じくアカデミックスキルにおいて高大の連続性を見出すとともに、高校における部活動と紐づけられた探究学習と大学における正課内外の学びに連続性を感じていることが示された。

終章では、当初仮設的に示した理論的枠組みに、正課教育と正課外活動の間での双方向移行、および大学の卒業論文・卒業研究の媒介的移行としての働きという点を加えるとともに、高大接続に対し、以下の 4 つの「新たな見方」を提起した。第 1 に、接続概念を、高校と大学低年次との間の限定的な接続ではなく、大学 4 年間をかけて行われる長期的な接続へと時間的に拡張すべきこと、第 2 に、正課教育と正課外活動の往還をふまえ、接続概念を空間的に拡張させる必要性があること、第 3 に、「円滑な移行」だけでなく、高校・大学間に存在するギャップを学習者自身が乗り越えることによって学生の学びと成長が促される可能性があること、第 4 に、一方向的・一律的な「学びの転換」ではなく、各大学・学生の実態に応じた個別的・具体的な「学びの転換」を構想すべきこと、である。一方、本論文に残された課題として、少数事例の検討にとどまった点、対象事例の偏りの問題、調査デザインの問題、探究学習に関わる学習面に限定した検討にとどまった点、「円滑な移行」に替わるオルタナティブの構想を具体化できなかった点が挙げられた。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、高大接続（高校・大学間の接続）というテーマに対し、高校の探究学習が大学での学習にどう影響を及ぼしているか、また、その中で、実際に学生がどのような移行（transition）を行っているか、という視角から迫ろうとしたものである。

この 30 年ほどの間、大学進学率の上昇により入学者の多様化が進むにつれて、高校、大学という異質な教育機関をどう教育的に接続させるかが、理論的・実践的課題として認識されるようになった。

本論文の第一の特徴は、この高大接続の変貌を主題化している点にある。まず、1990 年代以降、高大接続のタイプが、高校で受験に向けた教科学習に取り組み、学力試験を経て大学へ入学するという「エリート型接続」と、高校で受験に向けた教科学習に注力せず、AO 入試や推薦入試を利用して大学へ入学する「マス型接続」に大きく分化した。さらに、2000 年代以降、SSH などで「高度化された探究学習」が導入され、2018 年の学習指導要領改訂によって探究が高校の教育課程に大幅に組み込まれることにより、エリート型・マス型の両方において「探究型大学入試」が実施されるようになった。本論文では、こうした接続の分化の下での高校の探究学習の普及が高大接続にもたらす影響について、多角的な検討が行われている。

ただし、先行研究では、初年次教育やそこでの「学びの転換」など、教育する側の視点からの議論が中心であり、実際に学生が 2 つの教育機関やその接点である大学入学者選抜をどう経験し、移行しているのかという学生側の視点は稀薄であった。本論文では、遡及的および追跡的なインタビュー調査と「再帰的テーマティック分析」を実施することで、学生側の視点から高大接続を描き出している。これが本論文の第二の特徴である。

本論文は序章・終章を含め全 8 章からなる。第 1 章・第 2 章では理論的検討がなされている。第 1 章では、高校・大学間の教育接続の現状が俯瞰され、誰による、どのような性質の接続かによって、「大学が提供する、移行期に焦点化した教育接続タイプ」と「主に高校が提供する、大学の学びを先取りする教育接続タイプ」に分類した上で、本論文では、SSH などの「高度化された探究学習」を経験した学生を主な対象とすることの意義が述べられている。

第 2 章では、そもそも「高大接続」が、高校卒業後そのまま大学に進学する学生が大半を占める日本に特有の概念であり、ヨーロッパでは「高等教育への移行」として研究されていることが指摘されている。そして、現在主流となっている「生成（being）としての移行」という概念が、制度的な移行や社会文化的文脈を後景化させたという問題をもつことから、ビーチ（Beach, K.）の「共変的移行」の概念を援用して、高校から大学への「単方向移行」が、高校での探究学習と教科学習の間の「双方向移行」、大学での卒業論文・卒業研究を見通す「媒介的移行」を内包するという理論的枠組みが仮設的に示されている。

第 3 章～第 6 章は、こうした理論的概念・枠組みを用いた実証的検討の章である。第 3・4 章では、研究型総合大学の学生を対象にした遡及的・追跡的インタビュー調査、第 5 章では、著者が探究学習の指導を行っている高校での質問紙調査と一部の生徒の追跡的インタビュー調査が実施されている。これら 3 つの章がいずれもエリート型接続を経験している学習者を対象にしているのに対し、第 6 章ではマス型接続を経験した学生の語りを分析することで、それとは異なるタイプの探究学習の高大接続への影響を検討している。

以上の実証的検討から得られた知見として興味深いのは、高校での探究学習が必ずしも「円滑な移行」をもたらしているわけではないこと、むしろ非連続性を主体的

に意味づけることによって移行をなしえているということである。学生が学習面で感じる連続性は往々にして、プレゼンテーションや引用の仕方などの浅いアカデミックスキルにとどまっていた。一方で、特に理系の学生の中には、低学年次の講義や実験での知識・スキルの学び直しに探究学習との非連続性を感じつつ、それを将来的に研究する上で必要な一部として意味づけられている学生もいた。また、高校の探究学習で得た興味・関心を大学の授業だけでなく、正課外の活動で発展させている学生もいた。これは、これまでの高大接続が、高校と大学低年次との正課授業での学びの接続に焦点化されていたのに対し、大学4年間全体を視野に入れ（時間的拡張）、また、正課教育の外にまで広げて（空間的拡張）、高大接続を捉えることの必要性を物語っている。

以上のように、本論文は、高大接続という問題について、探究学習重視という近年の動向をふまえて、学生が実際に経験している移行という点から描き出し、従来の見方をこえる理論的枠組みを提示した点に高い価値がある。ヨーロッパの移行研究を踏まえながら、それを再構築している点も評価できる。高大接続をこれほど包括的に理論的・実証的に検討した先行研究はなく、今後、高大接続を論じる上での必読文献になるだろう。

口頭試問においては、以下のような点が指摘された。接続概念に連続性と非連続性の両面が含まれているとはいえ、それにこだわることで分析がやや平板になったのではないか。理論的検討は興味深いが、それを実証的検討で十分回収できていないのではないか。移行の多面性を描き出したのはよいが、高校から大学への単方向移行が見えづらくなったのではないか。探究学習や接続のタイプを分類しているが、探究学習を経験した学生と経験していない学生の比較を行えば、探究学習の意味がより明確になったのではないか、などである。それに対しては、探究学習の経験の有無による比較は試みたが、有意味な知見が得られなかったなどの応答があった。

このように本論文には課題も残されているものの、それらは本論文の価値を損なうものではなく、著者自身にも、研究をより充実・発展させていく準備ができていることが確認できた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年2月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすること（期間未定）を認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降